# gtg

旅のフリーマガジンを発行している、慶應義塾大学公認学生団体S.A.L.。
幅広いフィールドで活動する学生たちが、旅への思いを綴る連載エッセイです。

#01

## 阿蘇の旅、ひとの旅。

高橋 渉

阿蘇の地に、一人で足を踏み入れたことがある。2月の寒い日に。熊本に住む先輩に、日本三名城ともいわれる熊本城や阿蘇の温泉に連れていってもらった。

阿蘇のふもとにある居酒屋で会った初老の男性。思い切って、初めて阿蘇に来た、と告げると、はじめはそっけない返答だったが、話が進むにつれて、雰囲気も打ち解けて話が弾んだ。人生の格言めいた言葉や、阿蘇の土地の話など、お酒が入った頭では忘れてしまうほどたくさんの話をした。

居酒屋で働いている、同い年の女の子。大学の春休みに遊びほうけている自分を少し恥ずかしく思った。彼女は旅の話を聞きたがった。いつか横浜に行きたいと言っていた。

阿蘇ユースホステルのおばあさん。先ほど電話したものです、と声をかけると、杖をつきながら、はいはい、とやってきた。案内された部屋に行くと、石油ストーブで部屋が温まっていた。彼女が前もってストーブを点けてくれていたのだ。道中寒いからと、軍手やたくさんのカイロをくれた。外が寒かったからか余計にあたたかさを感じた。

草千里で会った、アマチュアカメラマンのおじさん。彼も草千里の朝日を見に来ていて、カメラに収めようというところだった。阿蘇の火口越しに日の出が見られる、という場所に二人で並び、朝日を待った。その日は、火口からの煙と雲が日の出を邪魔して、きれいな朝日を見ることはできなかった。その後ふもとの阿蘇駅近くまで車で送ってくれた。車内ではカメラの話や、旅の話をした。降りた後は、彼にお辞儀をして礼を言った。

帰宅して数か月経った今も、あの2日間で会ったひとを、時々思い出す。4月に熊本で大きな地震があった。彼らの顔を何度も思い出した。誰一人、名前を聞かなかったが、なぜか、とても心配でたまらなかった。もう、ひとごとではなかった。落ち着いたら、もう一度阿蘇に行きたいと思う。

旅はひとと会うことで、面白くなる。どこかへ旅をしに行く、ということは、誰かに会う、ということだと思う。

**慶應義塾大学公認 学生団体 S.A.L.**

| ホームページ | http://salkeio.com/
| Twitter アカウント | @sal_keio